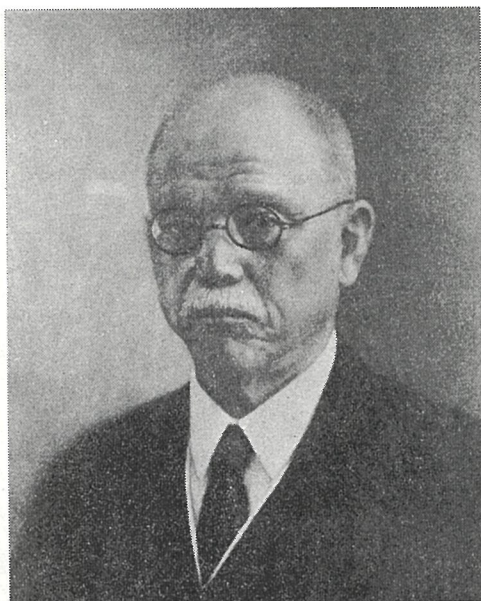




同志社人物誌(35)

一 貞 堀

岩 井 文 男

一、生涯のあらまし

同志社の先輩たちには、きわめて優れた特色に富んだ人物が数数存在したが、堀 貞一先生もまたその中の一人であった。先生は文久元年（一八六一年）一月四日大阪城内において、城代松平紀伊守役屋敷で生まれた。父は貞幹、母はよう子といい、先生はその長男

であった。前橋市紅雲町の曹洞宗長昌寺の墓域に貞幹の墓碑と並んで、堀家の墓がある。貞幹の墓碑には、從六位 判事堀 貞幹墓とあり、裏面には、明治三十四年一月十二日、旧丹波亀山藩士、永眠享年六十四と刻まれている。堀家の墓には、祖母なみ子、母よう子、長男一雄、牧師貞一、妻アイの五名の名が刻まれている、貞一は昭和十八年八月二十

六日永眠、八十二歳と記されている。従って、先生は、文久、元治、慶応、明治、大正、昭和と生き抜かれた人であり、明治黎明期の息吹を呼吸しながら、日本軍閥の最盛期第二次世界大戦の最中まで生活を続けられた人である。

先生誕生の年は、藩主の江戸勤めによって、一家に伴われて江戸に移ったが、慶応二年の春には丹波亀山に帰り住んだ。翌五年には、皇政復古の布令を聞いた。明治五年、父の仕官とともに京都に出て、明治七年春、京都中学校に入学した。同志社の設立は翌八年の晩秋となるが、その頃多少の好奇心もあって、友人とともにデビス教授の家に出入りして、教授の聖書講義の席に連なるようになった。これがキリスト信徒になり、やがてまた、牧師として、その生涯を送るような契機となったのである。明治九年十二月十日、京都第三公会において、新島先生より受洗した。ここに、かすかながらも召命を感じつつ、明治十年一月同志社に入学することとなり、本科二年級に編入された。明治十三年六月二十五日、綱島佳吉氏ら四人の同期生とともに卒業したが、学制の都合で暫く待って、明治十四年九月同

志社神学校に入り、同十七年六月二十七日総員十七名をもって神学校を卒業されたのである。

先生の同志社学窓生活は、これをもって終りを告げ、直ちに江州長浜の信徒の招きに応じられて、伝道戦線への第一歩を踏み出されたのである。

翌年六月長浜教会が設立され、同時に先生も按手札を了された。その前年京都の人すゑ女と結婚されたが、不幸にも長女千代子（後の額賀鹿之助牧師夫人）を残して、産後の肥立ちが悪く永眠された。ここに早くも先生は死別の悲哀を経験されたのである。当時先生は長浜と同時に彦根をも兼牧されていたが、それが縁となって、彦根の人中村耕治氏の長女アイ女を後嗣として迎えられた。

明治二十一年七月には京都四条教会の要請に応じて転任、二十四年には更に新潟教会へと移られた。その間、明治二十三年一月には、新島先生の召天に遭遇し、多くの同志社人とともに慟哭し、転居寂寥やる瀬もない苦渋を味ったのであった。しかし、同時に、一そう恩師への思慕の情を深められ、先生の期待に応えるの決意を固められたようである。

明治二十六年の春新潟教会を辞し、その年の夏には更に進んで横浜教会の開拓に従うこととなり、遂に教会を設立した。明治三十二年には、前橋教会ならびに共愛女学校長に就任された。前橋に在任中、祖母と父母との三名を天に送り、先生の悲哀の時期でもあった。この期には長女千代女は前述の額賀氏に、次女なほ子は浜氏に嫁せられ、先生にとり安堵の時でもあった。

明治四十二年秋、懇請黙し難く、ハワイの日本人独立教会に就任された。この頃より先生の伝道効果はしだいに面目を発揮されるに至り、ハワイ全島に目醒しい活躍が試みられた。この期には長男一雄氏を喪ったが、大正十五年一月には、先生の受洗五十年の記念すべき時を迎え、聖書説教と早天祈祷とは五十余回に及び、背後から不思議な力で、ぐんぐん押し出されるような靈感を感じ、遂に発して、教会内に一大霊的大運動が勃発するに至った。

昭和二年一月ハワイにおける先生のこの霊的活動を耳にした同志社は、恰も同志社教会創立五十周年記念伝道の講師として、遂に先生に白羽の矢を立てたのである。切なる要請

に動かされて、先生またこれに応ぜられるに至った。

やがて先生を迎え入れた同志社には、同志社教会を中心に、同志社の歴史にも稀なる一大霊的覚醒の運動が展開された。かくて著しい受洗者を出して、昭和二年六月中旬ハワイに帰任されたのである。

ハワイ帰任後、いまだ席の温まるを待たずして、同志社は先生を大学の宗教主任として、また同志社教会は先生を頼るべき牧師として、熱心にその赴任を懇請した。先生も、またハワイ教会も、この要請を神のみ旨として承諾し、先生遂に同年十一月再び同志社に來たつてその大任に就かれた。爾來昭和十五年二月二十六日同志社を辞して、東京に居を移すまで、足かけ十四箇年の間同志社のために献身的奉仕を続けられ、また同志社を根城として、全国にわたつて、先生独得な伝道の活躍を試みられたのである。

先生は同志社を辞しても、昭和十八年三月まで、任意同志社の教職員学生の要望を容れて、出張伝道に帰られたが、年すすむに従つて漸く身の衰弱を覚えられて中止されるに至った。昭和十八年五月本籍を丹波亀岡から東

京目黒柿木坂に移し、もっぱら療養につとめられた。その後病あらたまって、遂に昭和十八年八月二十六日午前五時四十五分天に召された。享年八十二歳であった。

昭和十八年九月二日女婿額賀牧師の弓町本郷教会において葬儀が執行され、翌日午後、これより先に、先生によって定められたる前橋市の長昌寺にある堀家の墓に埋骨された。その一部は分骨されて若王子に移されたのである。埋骨式が無事終るや、列席した木村清松牧師は、万歳を提唱、一同は大声に「堀貞一先生万歳!! 万歳!! 万歳!!」と三唱され、天父のみもとに送られたのである。

私は友人と共に先生召天に先だつ十日ほど前に、柿の木坂に先生を見舞った。先生はベツドの上に三角蚊帳を覆うて虫類の舞い入るのを防いでいた。暑さの中で、それでも至って元気に、蚊帳越しに、同志社や近況の思い出など語られた。今もなおその姿を眼前に見るの思いである。

昭和四十八年四月十二日午後、私は前橋市紅雲町長昌寺に堀家の墓を訪れた。長昌寺は曹洞宗のコンクリート造りの美しい寺である。位置は群馬県庁に遠くはない、南方利根

の河畔に位置する。墓域は広くはないが、立派な墓碑が櫛比している。堀家の墓は墓域の南端にあり、墓碑は一般記念碑石に似た扁平の自然石である。右側が堀貞幹の墓、左側が堀家の墓である。墓前にはまだ花も開かぬたんぽぽが萌え出で、右下には青靑と葵の株が茂っていた。その日は前橋地方特有の強い風で、この年の桜の最後を飾る花吹雪が乱舞していた。身は横なぐりに吹きつけてくる花の吹雪に打たれながら、墓域一面に敷き詰められた花の莖の上に立たされていた。風は強いが、私の心はいとも静かに、ありし日の先生の数数を偲びながらその冥福を祈らせていただいた。

二、同志社伝道

先生が講師としてハワイから同志社に来られた時、私は同志社大学の学生で、同志社教会の執事の一人をしていたため、多少当時の事情を承知している。先生の「十四年間の回想」(菅井吉郎著 堀貞一先生二五一頁)の中にも、「吾輩の就任した年には、幸同志社は賀川伝道の結果教会は順調であった。昭和三年は希望の年を迎えた。受洗者は続続起った」

と記されている。先生の来援の前に賀川伝道があり、賀川伝道では、中、高、大学を通じて、それぞれ大きな成果を挙げていた。特に大学では中島重教授が、自由キリスト教から社会的キリスト教へと思想的転換の示唆も与えられて、「雲の柱会」が組織されて、一部の学生が熱心な研究と祈りを続けていた。私は以前からヨセフ会員であった関係もあり、この会には加わらなかった。こうした情況下で堀先生のハワイのすばらしい活動が伝えられ、先生を迎えることとなったのである。昭和二年一月七日先生が横浜に上陸されるや、翌八日夕刻には早くも先生は、京都駅頭に姿を現わされた。教会は既に熱心な祈祷の中にあつたから「全同志社三百の教員及び多数の生徒が先生を迎え……その様恰もイエスのエルサレム入りも、かくやと思われ候、かく一同は先生を胴上げせんばかりに取り巻きて、同志社女学校デントン女史の家に導き晩餐を共に致し候」といった光景を表わしていた。先生もまた、この歓迎の光景を目撃して、いたく感激に充たされ「私は同志社の学生のほんとうの魂に触れたい、母校への最後のご奉公として死をも辞せぬ決心と覚悟を持

っている」と熱誠を吐露して叫ばれた。(前掲一六六頁)

先生の伝道は一月九日の礼拝説教から始められた。題は「見た事、聞いた事」で、「昔、神がヨナをニネベに遣わし給うた如く、その同じ神は今日私を母校に遣わし給うた。さればこの上は、神の私に啓示される所を憚らず話そうと思う。使徒ペテロとヨハネとは、八我見し所聞きし所を言わざるを得ず」と言った。私もまた過ぐる五十年間において、同志社に賜わった恩寵について話したいと思うのである……。」と説き起こし、ハーデー氏に助けられた新島先生、京都に同志社を設立するに当たっての山本寛馬氏の支援、熊本バンドの合流等等、相ついだ神の不思議な摂理を説教した。何れも同志社人の知悉のことながら、不思議なる霊能に導かれて説く先生の言葉の權威に満堂の人人の心肝は貫かれた。その魂は抉ぐられるごとくであった。更に教会役員が一致協議をこらし、祈り、「総長以下有力者の人人の中に靈火を燃やしたるを見ては、神必ず大いなる力を現わし給うに相違ない」と述べらるるや、熱烈なる祈祷相次いで起こり、終りを告げる機会さえもないほどで

あった。十日は中学生、神学生、北寮生、十一日には同志社女子校、午後は第二回の中学生全員への講演であった。「我は羊の門なり」と題した。木村清松牧師も同席、説教終るや、七百余名の生徒は一斉に起立して献身を表わし、教師またこれに呼応する。木村牧師は「今日は私がかつて堀牧師から洗礼を授けられて満三十六年目の記念日であります。今日この所に列席することができて、実に感慨無量です」とて熱捧を捧げる。十三日は再び女子校、十四日は大学予科、夜は同志社教会の祈祷会の奨励であった。この祈祷会で海老名総長は起って、「神が今日まで堀牧師を生かして置かれたには大いなるみ意があることで、誠に感謝である。同志社は今日まで幾多の大人物を出だした。けれども真に同志社スピリットを有する者は、堀牧師をもって第一とし、他に数多くはあるまい。牧師は既に七十才になられるから今後余命いくばくもないであろう。どうか諸君のうち、この復興の様子を今後の五十年、すなわち創立百年の時に伝えて貰いたい」。堀牧師も起って、「同志社に五千余名を容れる会堂が欲しい」と訴えれば、会衆これに和して一分間の祈りを捧

ぐ。会後一女子学生は、このために十円を獻じて名を告げずして去る。一般教師、学生の中からも続続寄付の申し込みがあったのである。(前掲一七六頁)更に堀牧師は、かつての沢山保羅牧師の大説教に接した感激を説かれて、聖霊の恩化を願うと結んで、この夜の奨励を終った。

それより引き続き、予科、高商、女子校と順次集会を重ねられて、一月二十三日が最後の運動日となった。午前五時若王子山に登り熱捧の後、新島先生の墓前に中村栄助翁と相擁して感泣した。当日の新島先生召天記念礼拝説教は海老名総長によって行われ、午後感謝会をもって、このたびの伝道の一切を終った。顧みて、今回の成果は堀牧師の稀なる靈動を中心としたことはいうまでもないが、海老名総長またきわめて積極的にその一翼を担って協力して、その賜を発揮せられたことをも記憶に止め置くべきであろう。

三、堀先生の信仰の特徴 聖霊体験

堀牧師をして特徴ある伝道者とならしめた有力なる基盤は先生における、きわめて明確

なる聖霊体験にあったと見られる。そして、この聖霊体験の有力なる契機となっていたものは明治十六年六月二十日夜、京都第二公会においてなされた沢山保羅牧師の「聖霊を愛いしむるな」との説教の感激が、その一つをなしていると考えられる。この点については前述するごとく同志社伝道の際にも説き及ばれたが、その後も先生は各所において力強く語っておられる。よほど印象深かったものと受けとれる。「翌六月二十日夜、京都第二公会の説教会において、『生涯忘れることの出来ない大説教』を聴いた。沢山保羅牧師の説教である。その夜は前席に大阪の聖公会のワレン師も語られた。が先生は沢山先生の説教に心を打たれた。『聖霊を愛いしむるな』という題で、エペソ四ノ三五を参照して、神は聖霊をもって我らの心を開発誘導して下さる。故に聖霊を拒む時は、遂に精神上の力を失う。恐るべきことである。曾て米国で或る老人が臨終に三人の息子を呼んで教訓した。自分は二十歳の頃聖霊に悔改めを迫られたが、今は事業の最中だからといって拒んだ。その後三十歳の時再度心を動かされた。今は事業の結についた処だといって拒んだ。更に

三十五六歳の頃にも聖霊に迫られたが拒んだ。今死に臨んでは、その心が更に起らず、真に寂しく死ぬよりほかはない。三人に呼びかけて曰く、お前たちは今直に悔改めて洗礼を受けよ。と遺言して亡くなった。遂に三人は父のすすめに従って洗礼を受け、その一人は伝道師として献身した。神は常に聖霊を以て教え給う。黙示録の聖語を引用して、『満堂の罪人よ!!生ける名あって死せる信者よ、汝ら聖霊を拒んで救われると思うか』と、恰も両刃の剣の如く並居る魂に迫った。満堂の人人は鋭く感動されたが、先生も強くその魂を打たれ、遂にその時の感動は生涯忘れることなく持ち続けた」と記されている。(前掲六五―六七頁)

堀先生は、この時の沢山牧師の顔の輝きをランプのせいかと思って見たが……「今日の心理学的説明もあるが、これは聖霊の輝きであるは疑いありません。私は実に涙を催し肅然とされて、神に審かれている心地がした。私は泣いて祈った。椅子からすべり落ちて跪いて祈った者が二十三名もあった」といっている。(前掲 一八一頁) 堀先生がこの時に強く聖霊を体験されるに至ったのには、一つの

事前状況があった。明治十六年五月、関東熊谷から西京第二公会に宛てた、新島先生の東京における全国信徒親睦の状況の報告を読んだことがそれである。堀先生はこれを読んでいたく感激をしていた。そうしたやさきに沢山牧師の説教に接したのである。とまれ、この霊動は明治十七年一月より同志社に起こった大リバイルに発展した。先生はこのようにして強く聖霊恩化の体得を経っていたのである。

これはまた先生が新潟教会在任中の祈祷会の時の聖霊体験に連続し、遂に木村清松、加藤直士氏等の受洗となって実現したのである。更にそれはハワイにおける先生の霊的覚醒運動の源流ともなっていたのではなからうか。これはまた移されて、同志社教会創立五十周年の堀先生の記念伝道の霊動ともなって現われることとなったのである。堀先生は確かに強い聖霊体験の人であった。

生活の霊化

次に先生の信仰の特徴は、日常生活の霊的体得である。まず第一に先生はきわめて広い交際家であった。しかし世の所謂交際家とは選を異にする。一般には交際は自己や自己の

事業に利用するためになされ易い。きわめて世俗的となりがちである。先生にあっては、世俗に交って世俗を脱し、そこにかえって神意や神霊の働きの妙味を探り出すといったところがあつた。木村清松牧師は先生を評して「洗礼を受けた一休和尚のような人であつた」(前掲 二七〇頁)といっている。宗教界の人としては西田天香、天龍寺関禅師、相国寺管長、その他の名僧知識がおる。その他学界、実業界、政治家等に広く交友を持った。前橋教会からハワイへ赴任の際など、きわめて有力なる教会外の名士が送別に加わつて真に別れを惜しんでいたという。先生はこれらの人々の特質を提えて、これを自己の霊的生活にしている。別段に禅寺で、特に修養したとも見えなかつたが、一種の禅の境地を体得していた。大方の人は説教や講演の直前には、多少精神的にいらしているものである。しかし先生にはそれが無かつた。きわめて超脱的であつた。新島先生自貢の杖の破片を携えて、贖罪を説く当りは先生の独壇場であつたが、先生がそれを手にした時の風景などは先生の性格の一片を偲び得て、一種のほえましさを覚える。明治十三年四月十三日

の朝拝において、この自貢の事件の落着直後「新島先生の用いられた杖を得たいと思つて、再び戸をあけて講堂に入れば、デビス、ラーネッド、ゴルドン、山崎為徳、森田久万人、市原盛宏の七人の教師だけがおられた。その辺を見まわしたが、も早ストライキを起こした新島公義等の組の者たちが拾い去つたあとで、僅かに三、四寸の断片が椅子の下に落ちていたのを見つけて拾い取り、生涯の宝物として収めた」と。(前掲 五九頁)あの満場緊張し切つた心境の直後の行動としては、余人の企て及ばない思慮と行動といえる。

先生の信仰には、確かに一定の神学体系や思想体系を求められないであらう。然るにもかかわらず、多くの思想家、学者の心を動かして感激を与える妙味を持つておられた。先生によつて芦田慶治教授も、中島重教授も、横井、宮川の先輩の人人さえも感心させられたとは思議であつた。もちろん深い学的契機を与えたか、どうかは知らぬが、何か人間のあり方に強い刺激と転換のモメントを提供していた。それは先生の私無き心の態度にあつたと思われる。先生の心の態度に雲霧が吹き払われて、明月を見るの観をいだかした

ところであらう。

先生の説教の声は大きかつた。もちろん今日のようにマイクの無い時であつたから止むを得ない。それにしても四畳半で話した声も、大講堂で話した声も、ほとんど同じではないかと思うほどであつた。熱してくると言葉なまりが連発された「ちゅうわい」という声が今も耳底に響いてくる。これはまた先生の説教の一種の風味でさへあつた。また私の不思議に思うことは、先生は、ある時は、夏の日照りに萎れ去つた道端の草のように元氣のない時があつたことである。アマレク人との戦いにモーセの手を支えた、アロンとホルが居らなかつた時であつたか。しかし聖靈に満たされて、先生が言つた言葉は、たとえ相手に敵しい時でも、それが受け容れられたのも先生の人徳であつたと思う。

先生は先輩から馬鹿と言われても、無学と言われても、そのまま談笑の中に易易として受け容れて、水のごとく流した。尋常一様の人の修養ぐらゐで追いつける人ではなかつた。霊の人堀先生を叙して、先生の徳を傷けぬことを願っている。

昭和十三年大学政治科・昭和十一年大学神学科・新島学園中・高等学校校長